

ラビ・ユダヤ教のパラダイムシフト：神殿崩壊と賢者の政治思想

手島勲矢

(大阪産業大学 人間環境学部 教授)

●ユダヤ教の歴史は、二つの「神殿崩壊」を前後して、その宗教的な性格を決定的に変化させてきた。ある意味、ユダヤ教は、2回の神殿崩壊の出来事を通して、聖書的な「預言者の宗教」から「賢者の宗教」へと構造的に進化したともいえる。今回の発表では、その変化の過程で生まれた二つのユダヤ教の前提——1) 預言の終焉、2) 多数決原理の確立——を政治思想的な観点から考察してみたい。つまりユダヤ教内におけるリーダーシップ思想の変遷である。この考察のもう一つの狙いは、キリスト教系の歴史学者とユダヤ学者の歴史理解の枠組み(structure)のずれを考えることでもある。その点で、Y. Kaufman, J. Klausner イスラエル学派の代表格によるドイツ学派の見方に対する批判また G. Alon, E. Urbach, H. Albeck, S. Safrai らユダヤ学のラビ文献の歴史研究にも注目する。

参考文献：J. Wellhausen, Israelitische und jüdische Geschichte (1914); Ed. Meyer, Ursprung und Anfänge des Christentums (1921-1923); E. E. Urbach, HaZaL (1961); J. Klausner, Historia shel ha-Bait ha-Sheni (1958); Y. Kaufman, Toldot ha-Emunah ha-Israelit, vol.4 (1956); M・ノート『イスラエル史』（樋口進訳：1983年）；石田友雄『ユダヤ教史』（1980年）；山我哲雄『聖書時代史（旧約編）』（2003年）

1. 二つのエルサレム神殿崩壊：前 597～586 年と後 70 年：

●なぜ滅びたのか？：賢者の見解では、第1神殿は偶像礼拝のため、流血のため、淫乱のため：しかし、第2神殿は、すべての主の命令を守っていたにもかかわらず滅びた。その理由は、お金を愛したことと、理由なき同胞同士の憎しみのためである。(PT ヨマ 1:1,38d,Sussmann562)

●キュロスの勅令(前 538 年)～シェシュバツアル～ダレイオス 1 世(ハガイ、ゼカリヤ：ゼルバベル、イエシュア：神殿完成・前 515 年)～アルタクセルクセス 1 世(ネヘミヤ～エズラ or エズラ～ネヘミヤ：律法の完成・前 5～4 世紀)～アレクサンドロス大王(前 333 年：イツソスの戦い)

●第1神殿と第2神殿の比較における賢者の見解：第1神殿が滅び、ウリムとトミム(預言をするための祭儀の道具)が失われた。(ソター 48b)

i)クラウズナーの批判：主観主義～相対主義；近代主義：捕囚以後、イスラエルは「民族」か、それとも「宗教的共同体」か？

ii)カウフマンの批判：律法の始まりが預言の終わり？：ヴェルハウゼン、マイヤー他

2. 第一のパラダイムシフト：「預言の終焉」(ソフ・ネブアー)の時代

i) 預言者から賢者の指導体制へ：聖典(テキスト)中心主義の確立。

ラビ・ユダヤ教資料：『セデル・ハオーラム・ラバー』(世界の年代記)第30章

聖書資料：詩篇 74:9 ダニエル書 9:24

外典資料：第1マカベア記 1:37-64; 4:46; アリステアスの手紙

ヨセフス：『アピオンへの反論』 1:8; 『ユダヤ古代誌』13:310; 17:345-347

補足(テキストの重要性)：17:149-167; 20:113-117

ii) パリサイ派～サドカイ派～エッセネ派

『ユダヤ古代誌』13:171-173; 18:11-25(3派の比較); 13:288-297(パリサイ派は多数派で議論好き)

15:373-379; 17:345-348(エッセネ派の予言); 17:41(パリサイ派の予言)

3. 第2神殿崩壊からバル・コクバの反乱まで(後70-135): タナイームの系譜

ヘロデ王(前37)——ヒレル/シャマイ; ローマ総督時代(6-41年)——ラバン・ガマリエル・ハザケン; 大反乱(66-73年)——ラバン・シモン・ベン・ガマリエル・ハザケン; 神殿崩壊以後——ラバン・ヨハナン・ベン・ザカイとヤブネ賢者の第一世代(70-130年); バル・コクバ反乱(132-135年)——ラバン・ガマリエル・デヤブネとラビ・アキバ他(ヤブネ賢者の第2世代); バル・コクバ反乱以後(138-180年)——ラバン・シモン・ベン・ガマリエル2世とウシヤ世代(ラビ・アキバの弟子たち); ミシュナー成立(180-220年)——ラビ・ユダ・ハナシーとタナイーム最終世代

4. ヨハナン・ベン・ザカイ以後: ヤブネ世代の性格と『ミシュナー』編纂

●セクト主義から多数決原理の確立:

ラバン・ガマリエル・ベン・シモン(デヤブネ)からラバン・シモン・ベン・ガマリエル2世

i) 『ミシュナー』エドウヨット 1:1-6; 5:6-7; 8:7

ii) バーバー・メツィア 59b

iii) 『ミシュナー』ローシュ・ハシャナー2:9

iv) 『トセフタ』ソター15:10

v) ペラホット 28a; ベホロット 36a

CISMOR 2005 全体テーマ「一神教における正典解釈の多様性と民主主義」

担当：現代ユダヤ教の権威構造と正典解釈—近代国家と民主主義をめぐって 28May'05

市川 裕

発表趣旨：はじめに、与えられた全体テーマについて、私がこれから考察しようとする際の思考の枠組みを明らかにし、それを「宗教と社会（国家）の関係への取り組み」として提示する。そこでは、近代以前と近代との間には大きな変化や相違があり、その理解は近代国家の問題にとっても、全体テーマと民主主義にとっても重要な前提となるので、近代における宗教の位置を確認する（序）。近代における大変化を、近代のユダヤ人解放という歴史的大事件を通して把握し（第1章）、その結果として、現代ユダヤ教がもはやひとつでなく、多様な権威によって担われていることを確認する（第2章）。その上で、現代イスラエル国家の政治形態を、宗教と国家との関係の視点、それも、宗教からみて社会（国家）とはどう意味付けられるかという問題から捉え直すことを試みる（第3章）。なお、この準備の過程で気づいた今後の検討課題は、現代のみならず、近代以前のユダヤ人社会の社会制度に関して、ユダヤ教における世俗的権威と宗教的権威の歴史を回顧し、宗教がそれらをトラーに基づいて根拠付けを行ってきたのか来なかったのかを知っておく必要を感じた。

目次

序1. 宗教と社会という問題への取り組みをふり返る

序2. 民主主義という概念と宗教について

第1章 ユダヤ人社会の変遷：近代以前と近代以後

第2章 現代ユダヤ教の権威構造と、それが生み出す正典解釈の多様性

第3章 ユダヤ教から見て現代民族国家イスラエルとはなにか：国家と宗教

付録. ユダヤ教社会における世俗的権威と宗教的権威の歴史

序1. 宗教と社会という問題への取り組みをふり返る

あたえられた主題の焦点というか、論点がどこまで把握できたか不確かであるが、要は、現実の宗教集団や指導者が、自らの政治的社会構造を宗教的原理によっていかに説明しているのかを考察することだと考えている。焦点は、現代の政治形態、とりわけ「民主主義」という政治形態に対する理解、説明、批判、根拠付けなどを、宗教者がどのように聖典理解の問題として捉えているかを分析するというように了解している。が、もう少し、問題を敷衍して考えてみたい。

古典的国家観の思考枠組：神の主権あるいは形而上学的社会観

もし世界の創造主が、人間に対して、正義と法と慈愛を実現できる社会を創造せよと命

じ、我々がそれを目標にして社会建設を行なうとすれば、どういう社会が理想として考えられるだろうか。理想が抽象的であればなおのこと、実践に当たっては解釈が不可欠となる。

アリストテレスは、神が命じるのではなく、人間が良く生きるにはどうすればよいか、という問いに対する哲学的探求によって、もっともふさわしい社会を見つけ出そうとする。したがって、政治学（ポリスの学）は、人間個人の倫理の問題（倫理学）を集団レベルで扱う極めて倫理的思想的な学問となる。

カトリック信者は、ローマ法王を頂点とする教会支配をもってその理念の実現を図ってきたが、それは今日、あるいは近世近代のカトリックの衰退と世俗国家観の隆盛にあって、どういう態度決定をしているのか。

新教は、法王の宗教的権威を否定し、信仰のみ、聖書のみ、万民祭司の理論によって、新たな宗教共同体の建設を目指したが、ルター派は、現存の世俗権力を神に祝福された政体として服従することを旨とした。

もし崇高な理性が、人間に、自由と平等と友愛を実現できる社会を創造せよと命じ、我々がそれを目標にして社会建設を行なうとすれば、どういう社会が理想として考えられるだろうか。フランス革命と共和政体が唯一考えられる体制か。

ユダヤ教では、長らくトーラーが唯一の神の意志の表明であり、その解釈をめぐって連綿とした解釈史の上に今日のユダヤ人社会が存在している。現代の国家形成という企ては、ハラハーが予想していない事態であるとする、トーラーからどういう規範が導かれるかという解釈問題があるはずである。しかし、建国を目指した多くのユダヤ人がもはや中世的ユダヤ教から離れ、西欧に同化し、西欧思想に立脚した人々でもあったことが問題の焦点となる。→これが私に課せられた課題

近代的国家観への世界観の転換：国家主権と手段としての宗教

以上は、いずれも宗教（形而上学的価値）から考えたとき、社会の存在意義とは何か、という関心から発している問いである。ところが、近代において、正にフランス革命は、こうした宗教と国家の関係を逆転させて、近代法治国家の自立的な世界観を普及させる。

即ち、その世界観の転換とは以下のような事態であろうか。

唯一神教の母体となったヘブライ語聖書の理念は、人間社会を含めたすべての事物を、唯一神の創造物と捉え、人間に対して世界秩序の維持と管理の責任を課したと理解されてきた。イスラムにおいても、基本的枠組みは同じであったと思われる。しかし、西欧近代国民国家にあっては、そうしたキリスト教的な桎梏を脱して、国家の主権が達成されたため、従来人間に課されてきた倫理的規範や目指すべき人間社会の理念が、もはやかつてのような拘束力を完全に失った。それに変わって、近現代社会の世俗主権国家は、かつて世界宗教が樹立した伝統的な倫理規範や支配理念と部分的には共通する理想を掲げつつも、もはや宗教の拘束力を脱したがゆえに、そうした規範を打破して新しい「自由な」世界の

構築を目指す事態を招来してきた。こうした宗教的規範の束縛を脱した「レヴィアタン」が現実的に西欧社会に出現して世界各地に広がって既に久しい。

国家の巨大化を予測した最初と考えられるのは、トマス・ホッブスの『リヴァイアサン (Leviathan)』(1651 CE) であるが、この書には、キリスト教の理念に則った社会のありかたについて、重要な一章が割かれている。この本の目次に沿えば、第1部で人間の本性についての分析があり、第2部で、その本性に基づいて建設される社会(Common-Wealth)が示され、第3部では、人間の自然的本性ではなく神の啓示の真理に由来する社会としてキリスト教社会 (A Christian Common-Wealth) の姿が論じられ、最後に「暗黒の王国(The Kingdome of Darknesse)」が示唆されて締めくくられている。

ホッブスが、第3部でキリスト教理念に基礎付けられた社会を描いたのと同様のことは、他の世界宗教においても、それ相応の統治と支配秩序の理念として構想され実践されてきたはずではないか。世界史の中世・近世は、世界各地で国家が体系化され古典が形成され、それに則った統治が実践された時代である。

しかし、近代社会においては、アトム(原子、個)としての人間の自然的本性が基盤となり、人間同士が自己保存のために社会契約による国家社会を形成することを根本命題となっている。

国家にとって、宗教そして道徳というものは、社会的結合を促進し強固にする手段と化する。宗教の正邪はもはや問題ではない?! 人間生命の究極の目標とされるのが、なんと、人間の生物学的生存の確保?! とは、なんたる退行現象か?! かつては、**人間の良き人生**とか、**神に義とされる人間**とか、**人間本来の面目の達成**とかが、人生の目標として設定されていたのに。国家社会の保存が自己目的化し、国家の価値は、功利主義的に測られる。

H.L.A.Hart, 'Social Solidarity and the Enforcement of Morality', in "Essays in Jurisprudence and Philosophy", Oxford Clarendon Press, 1983

さらに20世紀に、世界最初の世界大戦が終了した時点では、「民族」という集団が、自己の政治的帰属について自分で決定できるという国家理論が、さして疑問に付されることなく、圧倒的な支持を受けて承認された。

現在は、一応、民族と国家との1対1の結びつきが当然視され正当視されているが、イスラムの隆盛は、こうした常識をいったん解消させて、**nation-state** を相対化する機会を提供しているといえようか。